

深浦円覚寺所蔵

古典籍保存調査プロジェクトの意義と現況

渡辺 麻里子

一、はじめに

二〇二〇年度深浦円覚寺古典籍調査プロジェクト報告会は、今年で三回目となる。今回は、「幕末・明治期における津軽寺院と宗教文化の展開——深浦円覚寺の古典籍からみえる近代——」をテーマとし、前半は、深浦円覚寺の古典籍を実際に調査している弘前大学の教員による調査を通じて見出した今年度の学術的成果の報告で、後半は、特別講師の末木文美士先生によるご講演である。

今年のテーマは、明治期の津軽の宗教文化である。一昨年の報告会では中世に注目し、昨年度の報告会では近世をテーマとした。この流れを引き継いで、今年は明治期に注目することとした。日本思想史の原克昭教員は、円覚寺第二十四世尊岸の印信類や聖教を中心にして、幕末から明治にかけての円覚寺および津軽における仏教・宗教の状況を述べ、尾崎名津子教員は、明治期に活躍した円覚寺第二十六世義観の著作や活動を通じて明治期の津軽の文化状況を考察する。そして後半の特別講演では、日本仏教および宗教について広く論じておられ、近年は近代仏教に関する著作を次々と刊行なさっている末木文美士先生に「明治の仏教——真言宗を中心として——」という題で講演していただき、明治の仏教界の動向について皆で学ぼうという目論見である。

本来であれば、末木先生に弘前にお越しいただき（そして私も弘前に行き）、弘前大学最大のみちのくホールで、津軽の皆様にも多数お集まり

いただいてにぎやかな報告会とする予定であったが、思いがけなくこのコロナに阻まれ、やむなくオンライン開催とした。

三回目の報告会ではあるが、本日初めて聴講される方も多いと思われるため、私のこの報告会における役割は、弘前大学教員二名の研究発表と末木先生のご講演に先立ち、そもそも「深浦円覚寺古典籍保存調査プロジェクト」とは何なのかを、皆様に説明させていただくことである。

私は現在、東京の巣鴨に所在する大正大学に勤めているが、この三月までは弘前大学にお世話になっていた。在職中、良き縁に導かれて、この深浦円覚寺の調査を開始した立場から、本調査の経緯を振り返りつつ本調査の意義と現況について述べさせていただく。内容の一部は、これまでの報告書の文章と重なる点もあるが、お許しいただきたい。

二、深浦円覚寺とは

深浦円覚寺は、青森県西津軽郡深浦町に所在する真言宗醍醐派の寺院である（写真1）。深浦は、古くから、蝦夷地・日本海岸・瀬戸内海方面とを結ぶ北国海運の寄港地で、江戸時代は、松前航路と下北航路の分岐点であった。弘前藩四代藩主津軽信政の時代、青森・鰺ヶ沢・十三とともに四浦の一つとされ、北前船の寄港地として発展した。

また菅江真澄など様々な文人が訪れ、紀行・文学の作品にもしばしば登場している。

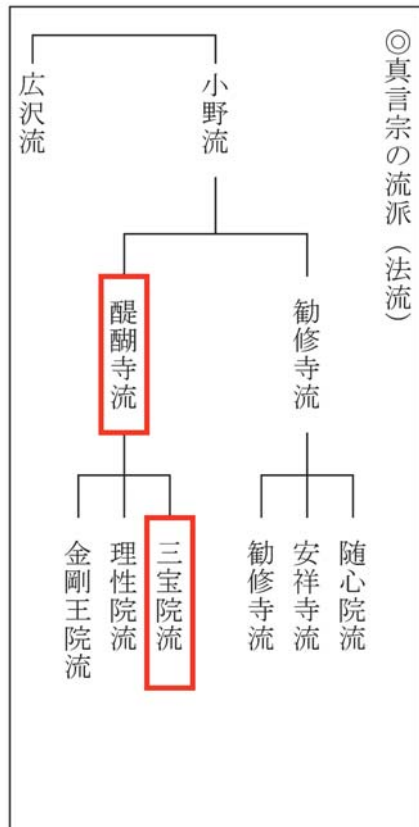
円覚寺の山号は春光山という。その創建は古く、大同二年（八〇七）に坂上田村麻呂が蝦夷征伐の折に、厩戸皇子作の十一面観世音菩薩を安置し、観音堂を建立したのが始まりで、その後、清和天皇の貞観十年（八六八）に、大和国の修験者円覚が再興したと伝えられる。円覚寺の寺名はこの円覚法印の名による。円覚寺は、古来から、北東北における宗教の中核として重要な役割を果たしてきた。

円覚寺の宗派は真言宗醍醐派である。真言宗は、弘法大師空海（七四〇～八三五）が開いたもので、弘仁七年（八一六）に高野山金剛峯寺を開創、弘仁十四年（八二三）には嵯峨天皇より勅賜された東寺教王護国寺を真言宗の根本道場とした。

円覚寺は本山を醍醐寺とする。醍醐寺とは京都市伏見区に所在する、真言宗醍醐寺派の総本山である。貞観十六年（八七四）に聖宝が創建し、延喜七年（九〇七）に醍醐天皇の勅願寺となった。真言系修験道の中心であり、円覚寺第二十六世義観は、明治十二～十四年にかけて、醍醐寺に学んでいる。

醍醐寺には多くの聖教・古典籍があり、醍醐寺の所蔵する聖教のうち約七万点の聖教が、二〇一三年に「醍醐寺文書聖教」として国宝に指定されている。

円覚寺の流派は、醍醐三宝院流である。三宝院は、永久三年（一一一五）、醍醐寺第十四世座主の勝覚僧正により創建され、康治二年（一一四三）には鳥羽上皇の御願所となった。歴代院主が醍醐寺座主となる醍醐寺内でも有力な寺院であり、また当山派修験の本山として大きな力を有していた。



また円覚寺は神仏習合の寺であり、修験道の寺院であったため、円覚寺には七基の鳥居があったという。明治の神仏分離の時に、木製の五つの鳥居が撤去されたが、二基の石製の鳥居は残っていたことが、円覚寺の古図に確認できる（写真2）。なおこの石製の鳥居は、一基は明治の大火の時、もう一基は昭和の台風の時まで残っていたとのことである。

円覚寺の本尊は厩戸皇子の作と伝えられる十一面観音である。本尊は秘仏で、三十三年に一度、ご開帳を行っている。前回のご開帳は二〇一八年七月に行われ、次回は二〇五一年の予定とのことである。

円覚寺には実に多くの御寺宝がある。そこで、文化財指定を受けているものを中心に、代表的なものを紹介する。薬師堂内厨子は、県内で最も古い木造建築物で、国指定重要文化財となっている（写真3）。薬師堂の棟札には永正三年（一五〇六）の記があり、薬師堂の鰐口には至徳二年（一三八五）の銘がある。藤原基衡の寄進とされ、豪華な装飾が見事である（写真4）。

円覚寺にはまた、多くの奉納絵馬がある。昭和五十六年（一九八一）には「円覚寺奉納海上信仰資料」が「国重要有形民俗文化財」に指定され、さらに近年、平成二十九年（二〇一七）には日本遺産に認定された。絵馬は、航海の安全を祈願したり、航海の無事を報告したもので、荒れた海が描かれたり、当時の船旅の様子が克明に描かれた貴重な資料である（写真5）。中でも、寛永十年（一六三三）に奉納された北国船の絵馬は、北国船と持斎が描かれていて貴重である（写真6）。

円覚寺の絵馬で特徴的なのは「髻額^{まげがしら}」である（写真7）。髻額とは、荒れた海上で見失った航路を占うために切った髻を、無事に航海を終えた時、御礼に奉納したものという。（髻を切ったのは陸に上がったからだとする説もある。）円覚寺にはこうした髻額が、多数伝えられている。

その他、円覚寺の宝物館には、毛髪で刺繍した仏涅槃図（写真8）や、『大般若経』六百巻など、多くの貴重な寺宝が展示されている。



写真3 薬師堂内厨子



写真1 円覚寺



写真4 厨子装飾



写真2 円覚寺古図



写真7 まげ額



写真5 奉納絵馬



写真8 毛髪刺繍の仏涅槃図



写真6 持斎

三、深浦円覚寺古典籍保存調査プロジェクトの概要——経緯と成果——

続いて、この「深浦円覚寺古典籍保存調査プロジェクト」とは何か、経緯と活動内容、調査成果などの概要を述べたい。詳しくは、これまで二〇一七年度と二〇一八年度に刊行した『深浦円覚寺所蔵古典籍調査報告書』第一集・第二集に「活動報告」として記しているので、そちらをご参照いただきたい。

今回このオンライン報告会にて初めてご参加くださる方に対して本プロジェクトを紹介するために、また今回で三回目となる深浦円覚寺古典籍保存調査報告会（フォーラム）を開催するにあたり、今回の報告会の目的を述べるために、このプロジェクトの立ち上げに関わった立場から、本調査の概要を説明させていただくこととする。

（一）一年目（二〇一七年度）の活動と円覚寺古典籍保存調査の開始

この深浦円覚寺古典籍保存調査プロジェクトは、色々な縁が重なってスタートしたものである。環境的な要因としては、二〇一五年五月十五日、深浦町と弘前大学が連携協定を結んだことがあげられる。地方に所在する国立大学は地域への貢献を果たすことを内外から要請されているが、弘前大学は、青森県の各地域の発展に寄与するために、県内の諸地域と包括的な連携協定を結んだ。その一環として深浦町とも連携協定を結んだのである。

翌々年の二〇一七年五月二〇日に、深浦町における地域貢献を具体化するために、弘前大学深浦エコサテライトキャンパスを開所した。「エコ」とは、旧来型の公共事業のように、ハードの「箱物」を建てるのではなく、建物は現在あるものを活用しつつ、ソフトの面、内容を充実さ

せたアカデミックな活動をしようという考えを表している。

二〇一七年七月一四日に、弘前大学深浦エコサテライトキャンパスの開校記念講演会を開催することが決まった、その記念すべき第一回講演の講師を、私が務めることとなったことが最初のご縁であった。

深浦町民に向けて「深浦に関する内容」を講演するのだが、私は、日本古典文学が専門で、仏教文学や寺院資料を研究している立場である。社会連携課と内容を相談し、私の専門に合わせて講演テーマを「深浦の歴史や文学」とした。個人的には、以前から深浦円覚寺の『大般若経』に興味があり、この講演を良い機会として深浦や円覚寺について学んでみようと考えたのである。講演題を「深浦再発見——円覚寺にみる宗教・歴史・文化の魅力——」と決めて準備を始めた。

講演に先立ち深浦町を訪ね、円覚寺はじめ、歴史・文化ゆかりの地を調査する必要があった。六月十九日、社会連携課の皆さんが下見や準備のために深浦に行くというので同行させていただいた。深浦の歴史資料館や文学館などを見学し、また円覚寺では御住職様にご案内をしていただき、宝物館の御寺宝についても詳しく御教示を賜った（写真9）。これまで円覚寺は個人的に二度ほど訪ねたことがあり、宝物館も拝見していたが、今回の見学では丁寧に解説をしていただき大変勉強になった。またかねてから閲覧したいと願っていた『大般若経』もこの時、拝見させていただくことができた。刊記も興味深く、訓点が施され、裏書きが多数あることがわかり、貴重な『大般若経』だということが確認できた。

長年の願いがようやくかなって満足していたところ、さらに円覚寺には聖教・古典籍があるとのことのお話があり、所蔵する貴重書を見せてくださった。古文書保存用の中性紙袋に丁寧に保管された古典籍の一群は、一見して古い、中世の聖教であることがわかった。これまで青森には中世資料が存在していないと聞いていたため、深浦の地にこうした貴重な古典籍があることを知り、大変驚いた。その日は残念ながらそれ以上の

時間はなかったため、日を改めて調査を行うご許可をいただいた。これらの間は、連携協定によって深浦町役場から弘前大学に派遣されている職員の方がおられて、円滑に取り運んでくださった（写真10）。

さてこの中世聖教を確認するために、講演会前の六月二十五日に急遽調査を行った。この臨時調査は、講演準備のために、ともかくその一束の中世聖教を調査確認する目的で実施した。調査場所は金比羅堂の堂内をお借りし、弘前大学に派遣されていた深浦町役場職員と弘前大学の学生、さらに木造高校深浦校舎の教員がご助力下さり、調査・撮影を行った（写真11）。早速袋を開いてみると、間違いなく中世の写本であった。また中には醍醐寺の旧蔵書であることが確認できるものもあり、貴重な典籍群であることが判明して非常に興奮した。それだけでも大変な発見であったが、この調査の折に、これらの一束にまとめられた約三十点ほどの聖教・典籍の他にも、堂内に別途、聖教が保管されていることを教えて下さった。早速拝見させていただいたところ、ブリキの大きな箱数箱の中に、ぎっしり入ったその書籍群は、真言宗・修験関係の貴重な典籍であることが見てとれ、別途時間をかけて本格的な調査を行う必要があると認識した。この数箱の聖教はざっと二、三百点ほどもあると思われる、是非詳しく調べたいと相談し、時期を改めて調査をさせていただくこととなった。

こうして弘前大学深浦エコサテライトキャンパス開校記念講演の講師と決まり、その準備で円覚寺をお訪ねしたところから、円覚寺の古典籍・聖教調査は始まったのである。

開校記念の第一回講演会の当日は、木造高校深浦校舎の一、二年生の全員が出席、その他にも深浦町民数名が集まってくれた。高校生からは、調査の意義などについて、様々な点から積極的な質問があった（写真12）。この時の高校生が、後に調査に参加してくれるようになる。

この後、弘前大学と深浦町の包括協定を踏まえて連携をより強めよう



写真11 金比羅堂での臨時調査

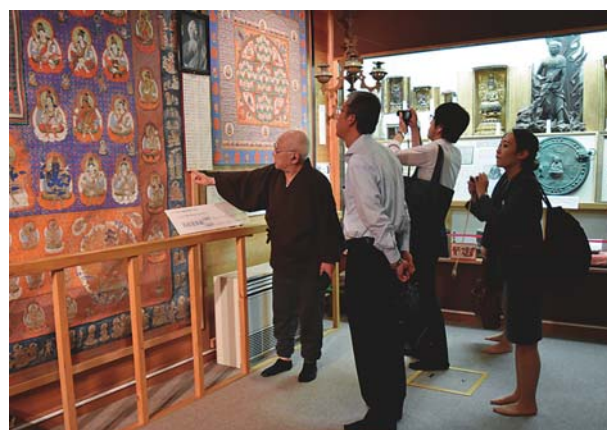


写真9 円覚寺宝物館見学



写真12 弘前大学深浦エコサテ開校記念講演



写真10 下見・調査

とする気運に後押しされて、深浦円覚寺調査は進められていくことになるのである。

七月の講演会が終わり、二〇一七年九月に入って、本格的に調査を開始した。この九月の調査は弘前大学社会連携課の支援を受け、社会連携課の推進する「滞在型学習」の一事業として実施することができたため、弘前大学の学部学生・大学院生も多く同行した（写真13）。同時に、深浦町役場のご協力を得て、深浦町内の施設で調査を行った。

この九月調査時には、円覚寺の聖教・古典籍は、前回の講演前の予備調査時に教えていただいた以外にも、まだ他に収蔵庫に大量にあることを知らされた。そこで収蔵庫から聖教・古典籍類を一旦全部運び出し、箱に入れ直して仮番号を付した。文書や書簡を分け、聖教・典籍類のみに限っても、約一〇〇〇点もの数を数えた。（なおこの後も調査にうかがう度に、別の新たな本が出現し、典籍数はどんどん増えて行った。驚きと同時に、円覚寺の奥深さに圧倒されるばかりであった。）

十月・十一月になると、深浦町役場内にある町民ホールをお借りして調査を行うようになった。弘前大学と深浦町の連携はさらに深まり、調査は本格的なプロジェクトとなっていた。調査には、地元の高校生（木造高校深浦校舎）でボランティア活動をしている生徒や、古典籍調査や地元文化財に興味のある二・三年生の生徒有志が参加し、高校と大学の合同調査となった。木造高校深浦校舎の引率教員は、偶然にも弘前大学の卒業生でもあり、素晴らしい縁に導かれた調査であった。

二〇一七年度の最後、二〇一八年二月の調査の折には、木造高校深浦校舎の全校生徒が受講する古典籍講座や、深浦町民向けの講座を実施した（写真14）。町民向け講座の後には、一部の町民が調査に参加してくださった。円覚寺の全面的な協力をいただき、地域の高校生や市民が、地域の文化財である円覚寺所蔵古典籍を用いて学ぶという企画を実施、地域のメディアからも注目された（写真15）。講座を受講した方に



写真 15 高校生の特別講座



写真 13 調査の様子



写真 16 古典籍マイスター



写真 14 市民向け講座

は「修了証」をお渡しし、調査に回数を重ねてご参加くださった方には「古典籍マイスター」の証明書^①をお渡しした(写真16)。深浦町民と高校生・大学生が一体となった合同調査団は、「青森モデル」として、次第に注目されるようになっていった(写真17・18)。

このように、はじめはささやかなスタートであったが、調査を重ねる度に、円覚寺には大量の聖教・典籍類が所蔵されていることや、その内容が学術的に極めて高いものであることが判明した。また協力者も増え、組織も広がって、調査の規模が次第に大きくなっていった。

初年度が終わる頃には、約二〇〇〇点の書目を確認し、その内容としても、中世写本が確認できたり、中には醍醐寺など中央の大寺院の旧蔵書とわかる聖教があることや、修験道関係書目が大量にまとまっていることが判明するなど、学術的に大きな成果があった。



写真17 調査の様子



写真18 調査の様子

(二)二年目(二〇一八年度)の調査と成果報告会の開催

二年目の二〇一八年度に入ると、調査は頻度を増し、数を重ねていった。二〇一八年度は、五月、六月、七月、九月、一〇月、十一月、二〇一九年二月と、頻繁に調査を行った。調査では、目録作成を目指し、書誌カード作成、書誌データ取り、撮影、データ入力などを行った。調査を進めるにつれて蔵書の性質や内容などが少しずつ判明していった。また新年度になると、深浦町役場における担当が総合戦略課から文化財を担当する教育委員会に引き継がれ、文化財調査の意味合いが深まった。

二〇一八年七月六日、円覚寺古典籍調査の成果を深浦町民にお伝えするために、公開報告会(フォーラム)を実施した。これが一年目、第一回の成果報告会である。会場は深浦町役場の町民ホールをお借りし、深浦の町民に向けて、円覚寺所蔵資料の意義を披露し発信する目的で開催




弘前大学深浦エコサテライトキャンパス 平成30年度第1回公開講座
2018年度深浦円覚寺古典籍保存調査プロジェクト成果報告会

深浦新発見!

—円覚寺の古典籍からわかること—

2018年
7月6日金
12:30~15:00 (開場12:00)
深浦町役場1階 町民文化ホール
入場無料 事前申込制

参加を希望される方は、事前に電話またはファックスにて7月2日(月)までにお申し込みください。

【お問合せ・申込み】
深浦町教育委員会 教育課
電話 0173-74-4119 ファックス 0173-74-3050
(FAXは12~17時)

主催 深浦町 弘前大学 深浦町教育委員会
弘前大学人文社会科学部地域未来創生センター
後援 東奥日報社、陸奥新報社
公益財団法人青森学術文化振興財団の協成を受けています。

プログラム

12:30 開会の辞 深浦町長 吉田 満

12:40~13:40
第一部 基調講演
中世の醍醐寺とその仏法
—「国宝醍醐寺文書聖教」を通して—
日本女子大学 名誉教授 永村 眞 先生

13:50~15:00
第二部 円覚寺古典籍保存調査成果報告

- ご挨拶 円覚寺 副住職 海浦 誠親
- 円覚寺古典籍保存調査について 深浦町教育委員会 常任理事 伊東 信
- 円覚寺古典籍保存調査に参加して 深浦町民参加代表 佐藤 英文
- 高校生・大学生による成果報告1~3
- 成果報告4 深浦町民参加代表 渡辺 麻里子

深浦町民参加代表の発表からわかること
—町民参加型の文庫資料調査を通して—
弘前大学 人文社会科学部 教授 渡辺 麻里子
弘前大学 深浦エコサテライトキャンパス 石川 隆洋

15:00 閉会の辞 弘前大学 理事(社会連携担当) 石川 隆洋

写真19 2018年度成果報告会チラシ

した(写真19)。

この成果報告会では、外部講師もお招きした。円覚寺の本山である醍醐寺で聖教調査団を率いておられる永村眞先生に特別講演をお願いし、醍醐寺との関係からみた円覚寺聖教の意義をお話しいただいた(写真20)。また寺院資料調査の成果報告として、調査に参加している高校生や大学生の研究発表も行い、高校生や大学生の視点から注目される資料について、学生からの独自の視点で報告がなされた(写真21・22)。

また私は、深浦円覚寺の調査によって判明した、これまで全く知られていなかった円覚寺聖教・古典籍の存在やその意義を紹介した。青森にはないとされていた中世写本が見つかったこと、醍醐寺や海龍王寺など、京都や奈良といった中央の大寺との直接関係がうかがわれる聖教が見つかったこと、修験道資料がまとまって発見されたことなど、円覚寺古典籍資料の稀少性や、学術的価値について報告した。会場では研究発表の他に、資料の展示も行い、深浦町民をはじめ、会場に集まった皆さんに、貴重な円覚寺資料を直接見てもらう機会とした(写真23)。

この第一回深浦円覚寺保存調査成果報告会では、研究上の知見を披露するだけではなく、調査団に参加している町民からのコメント(写真24)や深浦町教育委員会の担当者からの説明も行うなど(写真25)、地域と一体となった調査方法とその方法も披露した。古典籍調査では全国的に珍しい、地域と大学が一体で行う住民参加型の「深浦モデル」「青森モデル」としての調査様式も広く注目された。

二〇一八年度末の二〇一九年三月には、成果と活動の報告書として、『深浦円覚寺所蔵古典籍調査報告書』第一集を刊行した。七月の報告会の内容の他、調査の成果として、注目される聖教・古典籍の解題十六点をまとめた。冊子は広く頒布し、深浦円覚寺所蔵古典籍の意義を青森県内のみならず、県外の研究者・研究機関にも伝えた(写真26)。

二年目の二〇一八年度の成果として特筆しておきたいのは、外部機関



写真 22 大学生の発表



写真 21 高校生の発表



写真 20 特別講演



写真 25 教育委員会担当者のコメント



写真 24 町民のコメント



写真 23 資料展示

との研究協力と連携・支援が広がったことである。先に述べたように、深浦円覚寺所蔵古典籍保存調査プロジェクトは、当初は弘前大学と深浦町の連携協定のもとで行われたが、二年目の二〇一八年度は、弘前大学人文社会科学部および弘前大学人文社会科学部地域未来創生センターのプロジェクトの一部としても進めることとなった。

また二〇一八年度は、公益財団法人青森学術文化振興財団から「チャレンジ事業」に採択していただき、助成を受けることができた。その結果、調査活動やフォーラムの開催、報告書の刊行を行うことができたのである。円覚寺所蔵聖教の重要性は、「深浦」「青森」という地域内にとどまるものではない。私は、二〇一八年一〇月七日、第二回日本宗教文献調査学合同研究会（（於）名古屋大学）において、「深浦円覚寺（真言宗醍醐派）における聖教調査——町民参加型「青森モデル」について——」という題目で深浦調査の内容と活動について報告し、また二〇一八年一二月九日、日本仏教総合研究学会（（於）駒沢大学）において、「深浦円覚寺（真言宗醍醐派）所蔵聖教について——醍醐寺関係書籍・修験道関係書籍を中心に——」という題目で研究発表を行った。円覚寺聖教の内容や調査の意義を全国の研究者にも伝えるように努め、少しずつ注目されるようになった。

その結果、二〇一八年度末（二〇一九年三月二十九日）には、「人類文化遺産テクスト学研究センター」を有する名古屋大学人文科学研究科と、弘前大学人文社会科学部との間で研究協力協定を締結し、文献資料調査を通じた人文科学の学術的な研究の連携と交流を深めることとなった（写真27・28）。外部から関心を持ってもらえることは大変ありがたく、また色々なご指導を受けながら展開することが期待された。

このような経緯で、深浦円覚寺古典籍調査とその研究は推進され、発展していった。また同時に、成果を県内・県外に発信し、外部機関との研究における連携強化を進めていったのである。



写真 27 名古屋大学との協定締結



写真 28 名古屋大学との協定締結



写真 26 『報告書』第一集

(三) 三年目(二〇一九年度)の調査と成果報告会の開催

深浦円覚寺古典籍調査プロジェクトは三年目を迎え、調査はさらに進んでいった。三年目の二〇一九年度も、調査は、四月、五月、七月、八月、九月、一〇月、十一月、二〇二〇年一月、二月、三月と回を重ねて実施した。弘前大学の大学生・大学院生も多く参加し、木造高校深浦校舎の有志学生も参加した。深浦町民の有志も参加し、弘前大学(教員・学部学生・大学院生)と、深浦町(町役場(教育委員会)、町民、高校生)の合同調査を進めていった。

調査が進むにつれて、円覚寺所蔵聖教・古典籍は、深浦のみならず、津軽の歴史・仏教を研究するための貴重な資料であることがわかってきた。円覚寺第二十四世尊岸の書写収集した資料がまとまって発見されたのだが、尊岸は津軽の諸寺に住した僧たちから諸法の伝授を受けていたため、津軽において現在では廃寺となり資料の無かった寺院について、多くの情報が提供されることとなった。昨年、判明した京都や奈良といった中央と深浦・津軽を結ぶ「知のネットワーク」に加えて、津軽一円における真言寺院の「知のネットワーク」の核となる寺院であることが新たに明らかになったのである。

そこで、二〇一九年度の二回目となる成果報告会(フォーラム)は、青森県弘前市に所在する弘前大学を会場として、成果をより広く津軽地域の市民に向けて発信するための開催とした(写真29・30)。テーマを「津軽における寺院資料の世界——深浦円覚寺の古典籍を基点として——」とし、円覚寺所蔵資料を通じて、円覚寺を津軽全体の歴史文化の中に意味づけ、津軽の歴史を再考する試みとして行った。

二〇一九年度の成果報告会(フォーラム)は、まず調査母体である弘前大学を代表して、日本史を専門とする瀧本壽史教員が、近世津軽にお

プログラム

- 13:00 開会の辞 深浦町長 吉田 満
13:05 ご挨拶 円覚寺副住職 海浦 誠観
13:10 ご挨拶 弘前大学 人文社会科学部部長 今井 正浩
13:20～13:30 真言宗津軽仏教会による御法楽(実演)
13:30～14:20 講演1 近世津軽と深浦
弘前大学 教職大学院 教授 瀧本 壽史
(休憩10分)
14:30～15:20 講演2 深浦円覚寺所蔵古典籍の意義
——津軽の寺院における「知のネットワーク」——
弘前大学 人文社会科学部 教授 渡辺 麻里子
(休憩10分)
15:30～16:30 【特別講演】
地方寺院資料が照らし出す中世宗教の世界像
——聖教調査とアーカイブ化の意義とは何か——
名古屋大学 高等研究院 教授 阿部 泰郎 先生
16:30 閉会の辞 弘前大学 理事(社会連携担当) 石川 隆洋
弘前大学 深浦エコササティキャンパス長

講師紹介



特別講演 地方寺院資料が照らし出す中世宗教の世界像
——聖教調査とアーカイブ化の意義とは何か——
阿部 泰郎 先生
名古屋大学 高等研究院 教授
龍谷大学 特任教授

名古屋大学高等研究院教授、神奈川横浜国立大学、大谷大学大学院文学研究科博士課程修了。専門は、日本中世文学を中心とし、説話文学、仏教文学、芸能史、民俗学、寺院資料と幅広い。1984年に第1回日本中世文学学会賞受賞。著書は、『開城の皇位 中世の政治と宗教』(名古屋大学出版会、1998年)、『中世日本の宗教と政治』(同、2013)、『中世日本の世界像』(同、2018年)など多数。寺院資料の調査研究による中世の文学世界を切り拓き、中世文学研究を刷新されてきた。名古屋大東洋館長職の調査による『真福寺善本藏刊』(龍谷書店)や、仁和寺の聖教調査による『守戒法親王と仁和寺聖教の文庫学的研究』(勉誠社、1998年)は大変著名です。本講演では、地方における寺院資料の意義について、アーカイブ化などの視点も交えて、幅広い観点から解説していただきます。



講演1 近世津軽と深浦
弘前大学 教職大学院 教授
たきもと ひさふみ
瀧本 壽史

弘前大学教職大学院教授、平川市(旧平賀町)出身。早稲田大学大学院文学研究科修了。文学修士。専門は日本近世史。特に北海道地域における藩政史を中心に、津軽・下北地域をフィールドとした研究を行う。高校教諭、青森県立郷土館、青森県立歴史民俗資料館を経て、前任は弘前高校校長。新編弘前市史、青森県史など自治体史の編纂、執筆を行う。論文に「寛政改革と津軽土俗政変」(『津軽藩の歴史研究』四書刊行会)、「藩政と越えぬ地境間交流」(『列島史の南北』古川弘文館)など多数。本講演では、絵図や古文書をもとに、近世津軽と深浦の関係をわかりやすく解説します。

開催趣旨

弘前の寺院や歴史を、新たな視点から学んでみませんか？
近世の津軽と深浦との関係を絵図や古文書からひもときます。また深浦円覚寺古典籍調査で発見された資料から、津軽の寺院と歴史や、津軽の「知のネットワーク」を考えます。さらに名古屋大学の阿部泰郎先生に、地方における寺院資料の意義についてご講演いただきます。弘前・津軽の寺院や歴史に関する、近年の調査研究による新情報を掲載したフォーラムです。

真言宗津軽仏教会による御法楽(実演)



真言宗における御法楽を、実演していただきます。
法楽具や太鼓による演奏や、経典を美しく唱える声明を、実際に見て、聴いてみましょう。
(写真は「トラハク」での実演。今回はミニライブとなります。)

ミニ資料展覧

深浦円覚寺所蔵の貴重資料を会場で展覧します。鎌倉期写本や修験資料を、この機会に是非直接、御覧下さい。

2019年度 深浦円覚寺古典籍調査プロジェクト成果報告会
弘前大学エコササティキャンパス(令和元年年度特別公開講座)
弘前大学 人文社会科学部 名古屋大学 文学研究科 学芸学専攻 協定連携記念

津軽における 寺院資料の世界

——深浦円覚寺の古典籍を基点として——

2019年7月13日(土)
13時～16時30分 入場無料
(開場12時30分) 事前申込不要

弘前大学コラボ弘大8階 八甲田ホール
(青森県弘前市文京町3番地)
駐車場が限られているため、公共交通機関をご利用ください。

特別講演
地方寺院資料が照らし出す中世宗教の世界像
——聖教調査とアーカイブ化の意義とは何か——
名古屋大学 高等研究院 教授 阿部 泰郎 先生

主催：深浦町 弘前大学 深浦町教育委員会
弘前大学 人文社会科学部地域共生創生センター
後援：弘前市 深浦日報社 陸奥新聞社
公益財団法人青森県文化振興財団の助成を受けています。

問い合わせ
弘前大学 人文社会科学部総務課 G 担当：堀士
〒036-8560 青森県弘前市文京町1番地
電話：0172-39-3192
メール：jms192@hiroshu-u.ac.jp

弘前の寺院と歴史について、新たな視点で学んでみませんか？ 近世津軽の歴史や津軽の寺院に関する新発見がありました。このフォーラムでは、中世・近世における津軽と深浦の関係を、絵図や古文書、深浦円覚寺所蔵古典籍から考えます。また名古屋大学の阿部泰郎先生に、地方における寺院資料の意義についてご講演いただきます。津軽の歴史や寺院について、深く学んでみましょう。

写真 30 チラシ裏面

写真 29 2019 年度成果報告会チラシ (表面)

ける深浦の意味を問い直した。また私が、円覚寺資料調査の今年の成果として、津軽の寺院の歴史を解明する手がかりとなる新資料を紹介した。

特別講演は、寺院資料調査を専門とする名古屋大学阿部泰郎先生にお願いした。阿部先生は、諸寺の聖教調査の成果を踏まえつつ、「地方寺院資料が照らし出す中世宗教の世界像——聖教調査とアーカイヴス化の意義とは何か——」という題で、寺院資料調査の意義や地方寺院資料の重要性を解説してくださった(写真31)。

当日は、真言宗津軽仏教会の皆様のご協力を得て、御法楽の実演を行った(写真32)。八名の僧侶による、太鼓・鉦・法螺貝の演奏や声明などを聞き、会場は厳かな雰囲気となった。来場者は、普段は接することのない仏教の法要を体験し、美しい音色に魅了されていた。

また円覚寺から貴重な資料を弘前会場に運び、「資料展覧」も行った(写真33)。鎌倉期写本、真言関係資料、修験資料、朝鮮版など二十六点の資料を実際に来場者の皆さんに見ていただいた。

当日は、青森市や五所川原市など、県内各地からの来場があり、また高校生など若い世代の来場もみられた。来場者を一〇〇名と予想していたところに、約一七〇名ほどの方にお越しいただき、大変盛況な会となった(写真34)。資料見学と御法楽、講演を通じて、深浦円覚寺の資料が津軽・青森にとって貴重なものであり、日本の文化財としても意義があることが広く共有された。

三年目、二〇一九年度の成果として、円覚寺所蔵聖教・古典籍が、対外的にも次第に注目されるようになったことがあげられる。十月には、醍醐寺聖教調査団のご協力を得て、合同調査を実施した。マスコミも多数取材に訪れ、新聞・テレビに取り上げられるなど、地元でも広く関心を集めた。

十二月には、弘前大学深浦エコサテライトキャンパス令和元年度特別講座として、木造高校深浦校舎の一年生を対象に「地域探求講座」を実



写真 33 資料展示



写真 31 特別講演



写真 34 会場の様子



写真 32 御法楽

施した。また町民にも参加してもらい、「深浦の歴史と文化を学ぶ」というテーマで、円覚寺の歴史を学び、円覚寺所蔵聖教・古典籍を実際に手に取り、拝見する体験講座を行った。当日は円覚寺の金比羅堂に長机を並べて座布団を敷き、昔の寺子屋を思わせる風情で実施した（写真35）。宝物館の見学も行い、お寺の方にご案内いただいた（写真36）。高校生たちは地元の生徒であったが、円覚寺をお参りしたことはあっても、宝物館に入ったことがなかったという生徒が多く、地域の文化を知る良い機会となったようであった。

年度末には、『深浦円覚寺所蔵古典籍調査報告書』第二集を刊行した（写真37）。二〇一九年度も、公益財団法人青森学術文化振興財団の助成を受け、刊行することができた。第二集は、成果報告会の報告に加えて、今年度の調査成果として解題二十八点や、印信類を整理した一覧などを加えて刊行した。そして第一集と同様に関係機関に頒布し、円覚寺聖教の意義を広く知っていただくものとした。

（四）四年目（二〇二〇年度）の調査と成果報告会の開催

四年目の二〇二〇年度は、さらにプロジェクトを発展させていくように計画を立てていたが、三月初ころからのコロナ感染症拡大による社会状況の変化により、四月以降の計画を全面的に変更せざるを得なくなった。各地から大人数が集まるような合同調査が実施できなくなり、大学生・大学院生や高校生に調査に参加してもらうことも、また町民参加を募り町民の方と一緒に合同調査も実施できなくなった。高校生を対象とした特別講座も市民向けの古典籍講座なども、人を集める事業は、すべて中止となった。

このような状況下で、今年度の調査は、深浦町のご支援と円覚寺のご理解のもと、調査規模を小さくし、三密を避けて換気や消毒を行うなど

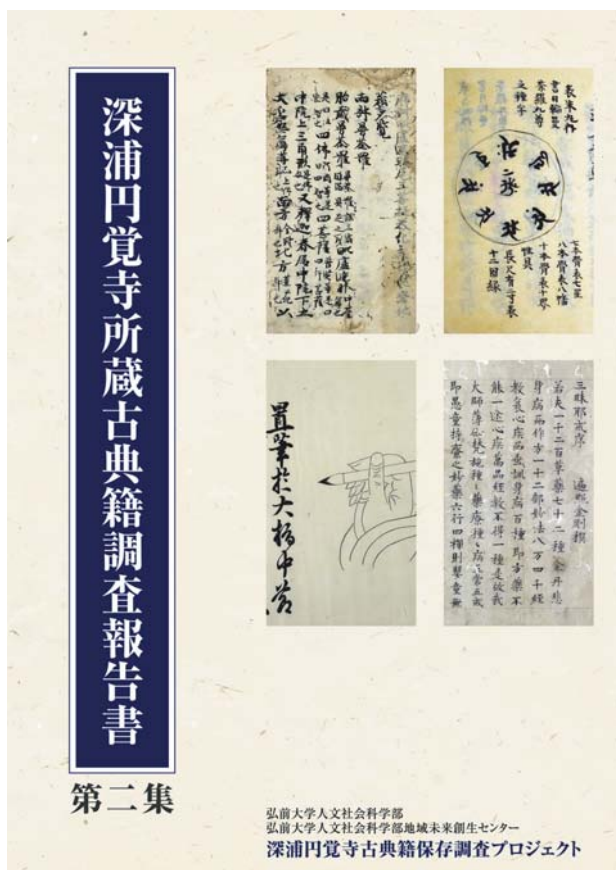


写真 37 『報告書』第二集



写真 35 特別公開講座



写真 36 特別公開講座

の感染対策を十分に行いながら実施した（写真38・39）。調査員は教員や町役場職員、円覚寺関係者のみに限り、円覚寺所蔵古典籍の目録作成および、青森県の文化財指定申請を目指す作業を進めていった。

二〇二〇年度の前期は、円覚寺が計画する古典籍の文化財指定申請に協力する作業を最優先課題として活動した。初年度より行っていた円覚寺所蔵典籍全体を対象とした目録作成は一旦後回しとし、『大般若経』の調査も将来の課題とした。円覚寺は、約五十箱もの古典籍を所蔵しているが、色々と検討した結果、今回の申請はそのうちの半数、二十五箱についての文化財指定を目指すこととなった。調査では員数の確認、内容・書誌の確認を行いつつ、申請用の目録作成のための作業を行った。詳しくは後述するが、円覚寺所蔵古典籍は、（１）中世近世真言関係資料、（２）歴代諸師・修験道関係資料、（３）韓国・朝鮮本関係資料、（４）和古書資料に大別されるが、このうち（１）～（３）の二十五箱を対象として、約二千点の目録を作成した。

これまで七月に開催していた成果報告会（フォーラム）は、今年度は、初めて秋十一月の開催の計画とした。今回、三回目となる成果報告会は、これまでの成果報告会をさらに発展させ、津軽・青森一円の市民により広く発信するために、弘前大学みちのくホールにて盛大に行う予定であったが、こうした社会状況のもとで実施形式を大幅に見直すこととなった。人を集める成果報告会の開催は難しい状況、よもや開催中止も危ぶまれたが、各関係機関のご協力のもと、オンライン配信での開催が実現した（写真40）。

特別講演の末木文美士先生もオンライン配信にご賛同くださり、東京（大正大学）から配信することとなった。また弘前大学の教員は弘前から、深浦町関係者（深浦町長、円覚寺副住職）は深浦からの配信を行い、結果として、弘前・深浦・東京の三点点からの配信という、新たな形式に挑戦することとなった。今後ウィズコロナの社会が継続すること



写真 38 調査の様子



写真 39 調査の様子

幕末・明治期における 津軽寺院と宗教文化の展開

— 深浦円覚寺の古典籍からみえる近代 —

ZOOMによるWeb開催
2020年
11月1日 日
13:00～15:50

パブリックビューイング会場（青森県弘前市）
弘前大学人文社会科学部4階 多目的ホール

事前予約制・定員40名（先着順）・青森県内在住者対象

本プロジェクトによる深浦円覚寺の古典籍保存調査活動を通して、津軽地域一帯の仏教文化がどのように変遷してきたのか、その背景となる本フォーラムでは、幕末から明治期にかけての津軽の宗教文化の近代化と津軽仏教の展開という二つの視点から、調査報告とあわせて、特別講演として日本思想史研究をリードする末木文美士先生に、近代化する明治期の仏教とそれとのかかわる津軽の人々の文化環境についてお話しいただきます。Web開催により弘前大学・深浦町・東京をオンラインでつなぐ「もうひとつの地域連携発信型」の新たな試みに、みなさんも参加してみませんか。

特別講演
明治の仏教
— 真言宗を中心として —
東京大学名誉教授
国際日本文化研究センター名誉教授
末木 文美士 先生

1949年生、山梨県出身、東京大学博士（文学）、東京大学名誉教授、国際日本文化研究センター名誉教授、総合研究大学院大学（経典）名誉教授。
ご専門は、仏教および日本思想史・宗教史、中世仏教を中心に、近代化の仏教思想まで幅広く。著書が多数あり、主なものとして『日本仏教思想史論考』（大塚出版、1993年）、『平安朝前期仏教思想の研究』（春秋社、1995年）、『源朝としての近代仏教』（中公選書、2017年）などがある。今秋のご講演では、明治の仏教について、真言宗を中心に幅広くご講演いただきます。

主催 深浦町 弘前大学 深浦町教育委員会
弘前大学人文社会科学部地域未来創造センター
後援 弘前市 青森日報社 読売新聞社

公益財団法人青森県文化振興財団の助成を受けています

※深浦町会場については、深浦町よりご案内があります。
※社会状況によっては会場での公開観覧は中止する場合があります。

問い合わせ
弘前大学人文・地域研究科総務G 国際情報
〒036-8569 青森県弘前市文京町1番地
電話0172-39-3192 Eメールjms192@hiroaki-u.ac.jp

2020年度 深浦円覚寺古典籍保存調査プロジェクト成果報告会
弘前大学深浦エコサテライトキャンパス 令和2年度特別公開講座

写真 40 2020 年度成果報告会チラシ

となった場合でも、こうした新たな形式を開拓し、実現できたことには、将来に向けての大きな可能性と意義が感じられた。

本日のフォーラムは、近代の仏教に注目している。これまでのフォーラムを改めて振り返ると、第一回目のフォーラムは、深浦町にて、主に深浦町の町民の皆様に向けて、自分たちの町の深浦円覚寺にある文化財の意義を知っていただきたいという目的で行ったものであった。

また二〇一九年度の第二回目のフォーラムは、弘前にて開催し、津軽全域の市民に向けて、深浦円覚寺は津軽一円の宗教の中核になっていることや、円覚寺所蔵の聖教・古典籍が津軽の寺院ネットワークや、津軽の仏教や歴史を明らかにする貴重なものであること、また京都や奈良といった中央と津軽を結ぶ役割をしていることを明らかにした。

そして今年度、第三回目のフォーラムは、「幕末・明治期における津軽寺院と宗教文化の展開」と題し、「深浦円覚寺の古典籍からみえる近代」をテーマとした。これまでは、明治以前の中世・近世における円覚寺に注目していたが、今回は、円覚寺所蔵資料の中から、歴代住持の明治期の活動と、明治期における円覚寺の意義と役割について着目した。

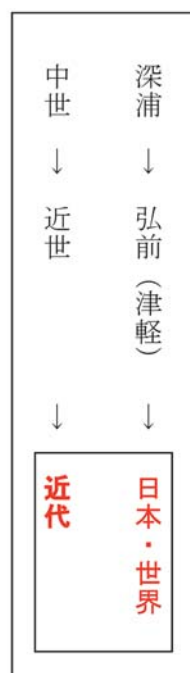
円覚寺住職の活動や書写蒐集した資料・著作は、明治期における津軽の文化を知る手掛かりとなる重要なものであることがわかってきたからである。

原克昭教員は、円覚寺第二十四世尊岸の聖教を中心に、幕末から明治にかけての津軽の仏教の展開を解き明かす。また尾崎名津子教員は、第二十六世海浦義観の著作を通じて、明治期の津軽の文化活動を具体的に解析する。原・尾崎両教員が、円覚寺資料から幕末から明治にかけての津軽の仏教・文化状況を明らかにしたところで、末木文美士先生の特別講演によって、明治の仏教界の状況や世界の中の日本の有様を解説していただくこととした。

まとめると、これまでの二年間・二回のフォーラムにおいて、一昨年

は深浦における円覚寺聖教の意義、また昨年には弘前（津軽全体）における意義を検討したが、本日、三年目・三回目のフォーラムでは、津軽から日本、そして世界の中の日本における意義を問うものとしている。またこれまで、中世・近世の津軽の宗教文化を知る意義について考察してきたが、今回は近代の津軽の宗教文化という点に注目することとしたのである。

◆ 深浦円覚寺古典籍保存調査報告会におけるテーマの変遷



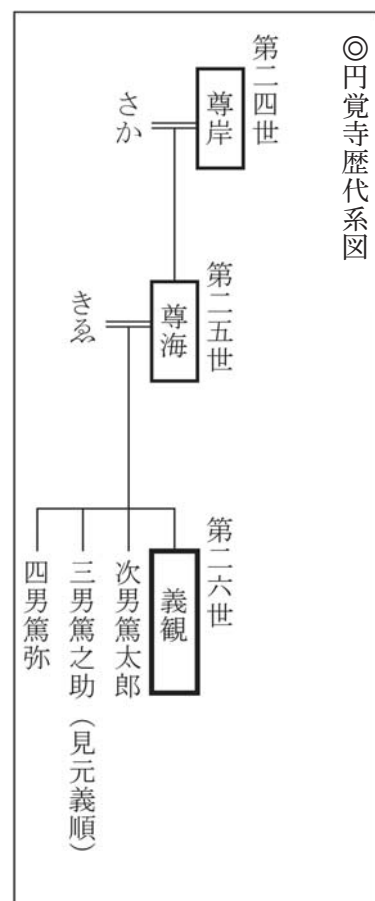
四、深浦円覚寺所蔵古典籍資料の意義と調査の現況

深浦円覚寺所蔵古典籍資料は全部で約五十箱に整理され、それらは以下の様に大別される。

- (1) 中世・近世真言聖教（写真41）
- (2) 歴代住持・諸師聖教、修験道資料（写真42・43）
- (3) 韓国本・朝鮮版（写真44）
- (4) 和古書（近世の外典類）

これらはいずれも全て貴重な古典籍であるが、中でも特に、(1)～(3)までの二十五箱（写真45）、約二千余点の聖教・古典籍は、(4)の和古書（近世の外典類、漢籍・文学などの書籍）に比して、学術的に

◎円覚寺歴代系図



に重要なものと思われたため、(4)を除いた(1)～(3)の古典籍について、青森県の文化財指定の申請をするための準備・調査を進めていった。

(1)の中世・近世真言聖教には、中世写本も含まれる。『秘蔵記』や『一行禪師字母表』のような鎌倉時代写本や、『灌頂私記』のような室町期写本が見つかった。^②鎌倉期・南北朝期写本、室町期写本は青森県内では他に類を見ないとのことである。また『大師御行状集記』や『三蔵法師袈裟図』など、京都の醍醐寺や奈良の海龍王寺といった大寺の旧蔵本と確認できるものが見出された。^③他にも京都の大覚寺、東寺(京都)、高野山金剛峯寺(和歌山)など、真言宗の本寺・本山たる大寺院の旧蔵書や関連書が発見されており、中央や都とのネットワークが注目されて貴重である。現在のところ、深浦円覚寺の所蔵となった経緯については未詳であり、その解明は今後の課題である。

(2)の歴代住持関係聖教は、円覚寺第二十四世尊岸、第二十五世尊海、第二十六世義観が書写・収集した本を中心に、歴代住持、関係諸師の関係資料である。

第二十六世義観(安政二年(一八五五)～大正十年(一九二二)、六六歳)は、『日本大蔵経』『修験道章疏』三巻の編纂に協力し、当山派修験



写真 41 中世写本



写真 43 第二十六世義観写本



写真 42 第二十四世尊岸写本

に関する本の底本を提供した人物である。『日本大蔵経』を編集した中野達慧とやりとりした書簡も円覚寺に遺されている。また「聖役教会」の初代会長でもあり、機関誌『神変』の初代主筆でもあった。『神変』は明治四十二年（一九〇九）五月十五日に第一号が刊行され、現在に引き継がれているものである。また修験宗再興独立請願を、文部大臣および宗務局長宛に送るなど、修験宗の復興のために尽力した。明治期の修験道を考える上で重要な人物である。円覚寺の聖教調査によって、義観の修験道関係書物の収集の礎は、すでに祖父尊岸によって行われていたことが判明した。

円覚寺第二十四世尊岸（享和三年（一八〇三）～明治五年（一八七二））は、十六歳から十九歳頃の若い時代に津軽の諸師から伝授を受け、その切紙・印信を自分自身で書写して冊子にまとめた。また晩年五十九歳から六十四歳にかけて、再度書写してまとめ直し、後世に伝えられるようにしていたのである。尊岸の書写収集活動によって、現在廃寺になっている津軽一円の真言宗寺院、修験寺院の状況が確認でき、津軽における僧侶たちの「知のネットワーク」が解明できることとなった。義観の書物が修験道において貴重であることは知られていたが、今回の調査で初めて、義観の祖父尊岸の修験資料が発見された。尊岸は津軽の修験寺院の諸師より伝授を受け、様々な資料を書写収集している。真言・修験の伝授目録まで保持していて注目される。尊岸の資料は、津軽の歴史を繙く資料という意味から貴重であると同時に、近世後期のまとまった修験資料として修験研究にも大きく寄与するものと期待される。本報告書に、「深浦円覚寺所蔵円覚寺第二十四世尊岸関係書目一覧」として、円覚寺が所蔵する尊岸関係の資料全二五五書目の資料データを一覧にして掲載したので、参照していただければ幸いである。

その他（2）には、円覚寺に関わる諸師関係の書物をまとめている。この（2）のグループには、修験道・歴代関係資料、印信類、諸師関係



写真 44 韓国・朝鮮版



写真 45 円覚寺所蔵聖教・古典籍

資料、金比羅堂資料を含めている。円覚寺歴代は、津軽の様々な寺院ネットワークにおいて諸師・諸師から学び、複数の師資相承・伝授関係にあり、様々な資料を伝えている。そのため円覚寺の諸師資料は、近世末から明治にかけて津軽の寺院・文化を解明する貴重な資料となっている。本報告書には、海浦由羽子氏による「深浦円覚寺所蔵古典籍・古文書による津軽寺社の歴代住持・宮司一覧表」が掲載されているが、本調査が対象とした聖教・古典籍類の情報に円覚寺所蔵古文書資料からの情報も加えて、近世の津軽の寺社の住持・宮司名を調査した一覧である。津軽の歴史を解明する貴重な資料となっているので、是非ご活用いただきたい。

（3）は韓国・朝鮮版の書物群である。深浦円覚寺に韓国・朝鮮版の版本・写本があることはこれまで全く知られておらず、本調査で初めて

明らかになった^④。円覚寺に多量の韓国・朝鮮本が所在するのは、円覚寺第二十六世義観の弟、篤弥の関係である。篤弥（一八六九～一九二四）は、明治二十三年（一八九〇）の末から京城にわたり、京城商品陳列所の主任を務めていたという。また義観もその関係で明治四十三年（一九一〇）に渡鮮しており、直接にあるいは篤弥を介して入手したものと考えられる。中には孤本と思われるものもあつて貴重である。これらも今後のさらなる検討を要している。

これらの本の他にも、版経の『大般若経』六百卷がある。これは、文化五年（一八〇八）初冬に近江屋新助が刊行し、元治元年（一八六四）九月二十六日に奉納されたものである。奉納者を記した裏書きや、第二十六世義観が付した訓点や注記もあつて注目される。

まだまだこれ以外にも出現する本があるかもしれないが、一旦、現在まで判明しているところで整理をした。円覚寺では所蔵する古典籍全体のうち、以上の（１）～（３）について、円覚寺聖教の中でも特に貴重なものと判断されるため、県の文化財指定を目指して申請をしたいと考え、準備作業を進めているところである。

以上のように二〇二〇年度は、コロナに翻弄されつつも、文化財指定の申請準備を目指した作業を中心に進めてきた。ここまではある程度調査は進んだが、円覚寺所蔵古典籍は全体の点数も多く、まだとても全体像をつかむには至っていない。また一通り目録化ができた聖教・典籍についても、内容の精査・研究は今後の課題である。

円覚寺所蔵聖教・古典籍のうち、（１）～（３）の二十五箱、約半数については目録化を行ったが、今後はさらに（４）の約二十余箱について調査を行い、書誌カード作成、データ入力、目録作成を進めて行きたいと考えている。やらなければいけない作業はまだまだ残っている。先に述べた『大般若経』六百巻の詳しい調査もまだ残っており、端本の経典類も今後整理が必要である。

コロナの感染拡大が収束しないと、多くの人数が集まって行う文献資料調査はなかなか実施できない。高校生や大学生、町民を含めた合同調査を実現させるのはまだ許されない状況である。コロナの状況が長引き、この間に、せっかくこれまで関心を持って参加してくれていた高校生や大学生たちが卒業し、高校・大学を離れていってしまうのが大変残念である。

一日も早くコロナ感染拡大が収まり、再び町民の皆さんや、高校生・大学生の皆さんと共ににぎやかに合同調査ができる日が来ることを待ち望んでいる。

五、おわりに——今後の課題——

以上、深浦円覚寺古典籍保存調査プロジェクトの沿革を述べつつ、意義と現況を説明してきた。

本調査は、二〇一七年六月に開始し、弘前大学と深浦町の連携協定による事業の一つとして、弘前大学では、社会連携課、人文社会科学部、人文社会科学部地域未来創生センター、人文社会科学部教員、学部学生、人文社会科学部研究科学生（大学院生）、深浦町では、深浦町役場、深浦町教育委員会をはじめ関係部署、木造高校深浦校舎の高校生・教員、深浦町の町民の皆様など、多くの方に支えられて調査を進めてきた。また永村眞先生、阿部泰郎先生、末木文美士先生、醍醐寺調査団の皆様をはじめとした、外部の研究者の方々から多くの貴重な御指導・御教示を賜ってきた。

多くの方のご支援を賜りつつ調査を継続・発展させて来られたことに、心より御礼申し上げます。

最後にまとめると、この円覚寺古典籍保存調査には、大きく三つの意義があると考えます。第一に学術的な意義、第二に地域貢献や社会活動と

しての意義、第三に地域の文化財を守る意義の三つである。

第一の学術的な意義としては、深浦（津軽・青森）という地域にあって、真言宗の教学、また修験道の体系だった資料として貴重な資料が見つかったことの意義である。中央寺院との関係や、津軽一円のネットワーク、修験道資料としての内容分析など、今後さらに研究し、解明していく必要がある。

第二の地域貢献や社会活動としての意義である。市民や高校生、大学生などの皆さんと一緒に資料調査は、「深浦モデル」「青森モデル」として注目されており、こうした社会活動・教育活動は今後も継続発展させていきたい。今はコロナ状況下でなかなか「集まる」ことができないが、コロナが収束したら、または是非とも再開させていきたい。

第三に、地域文化財の保存という意義である。「古典籍調査」は、昔の人が様々な思いから書き残したものを、今に伝え直す意味がある。現代に受け継いだ私たちが次の世代に伝えるためにも、調査をし、現状を把握し、現代に蘇らせることは大きな意義がある。古典籍調査は、時間も労力もかかる作業であるが、所蔵者と地域の人の理解を得つつ、一緒に進めて行くことができれば良い結果につながっていくだろう。地域の文化財として皆で意識を共有し、大事にして、次の世代に継承していきたいものである。

現在、コロナ感染拡大による社会変化によって、コロナ以前に立てた調査計画を全て見直さなくてはならなかった。多数の人が密に集まったり行う文献資料調査は実施できなくなり、高校生や町民の参加が実現できなくなってしまっている。また自身東京の大学に移り感染拡大地に居住している状態では、県境を移動することが難しくなっている。こうした予想できなかった状況の下で、今後、どのように保存調査活動を継続していくか、また次世代にこれらの文化財をどのように伝えていくか、さらに考えなければならぬ状態となっている。

深浦円覚寺古典籍保存調査は、残された課題に取り組むためにも、これからも継続し、発展させていきたいと考えている。コロナ状況下でなかなか思うようにはいかないが、できることを工夫して、少しずつでも進めていきたいと考えている。今後も引き続き皆様のご協力・ご支援をお願い申し上げる。

〔注〕

（１）「古典籍調査マイスター」の証書は現在一級～三級まで発行している。

（２）拙稿「深浦円覚寺所蔵古典籍の概要」（『深浦円覚寺所蔵古典籍調査報告書』第一集、二〇一九年三月）を参照。

（３）拙稿「解題」（『深浦円覚寺所蔵古典籍調査報告書』第二集、二〇二〇年二月）を参照。

（４）藤本幸夫『日本現存朝鮮本研究 集部』（京都大学学術出版会、二〇〇六年）、同「日本現存本朝鮮本とその研究」（『日韓の書誌学と古典籍』アジア遊学一八四、勉誠出版、二〇一五年）などに詳しい。

〔参考文献〕

- ・『深浦円覚寺所蔵古典籍調査報告書』第一集
- （深浦円覚寺古典籍保存調査プロジェクト、二〇一九年三月）
- ・『深浦円覚寺所蔵古典籍調査報告書』第二集
- （深浦円覚寺古典籍保存調査プロジェクト、二〇二〇年二月）
- ・海浦由羽子『驗乗末資海浦義観』（深浦町教育委員会、二〇〇三年）
- ・豊島勝蔵『深浦澗口観音古文書』（西北刊行会、一九八五年）